

柴田町住民自治によるまちづくり基本条例審議会（令和3年度第1回） 要旨

日時：令和3年7月14日（水）

午後2時00分～午後3時42分

場所：まちづくり推進センター（ゆる.ふら）

<出席者>

中嶋紀世生委員、志子田清蔵委員、阿部有子委員、関六郎委員、佐藤正壽委員（遅参）、村山菜穂子委員、大庭三余子委員（佐々木鉄男委員、児玉芳江委員欠席）

<事務局>

藤原まちづくり政策課長、畑山課長補佐、佐山主任主査、佐々木主事

<傍聴人>

なし（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、傍聴席はなし）

1. 開 会

2. 会長あいさつ

3. 会議録署名員の指名

阿部委員・関委員（輪番制）

4. 議 事

住民自治によるまちづくり基本条例に基づくまちづくりの実施状況について（テーマ：地域の連携について）

中嶋会長：それでは次第に沿って始めます。住民自治によるまちづくり基本条例に基づくまちづくりの実施状況について、今日のテーマが地域の連携についてということで話し合いをしたいと思います。

まず町の方から、少しこれまでの流れについて、まとめた資料を作っていたので、説明いただきたいと思います。よろしくお願いします。

（事務局よりこれまでの議論の経過について説明）

中嶋会長：ありがとうございました。今日は地域の連携についてということで事前に皆さんに意見をいただきました。意見聴取シート、資料1をご覧ください。まずこれを少し確認して、その後にまた皆さんからご意見いただきたいなと思います。

ちょっと全体的に確認していきたいなと思います。

私の方で、簡単にご紹介していきたいなと思うので、それぞれ後で補足もいただきながら、一通り確認できればと思いますので、まず一番上の佐々木委員さんのご意見から見ていきたいと思います。

佐々木委員さんは大学の関係者という視点から、仙台大学と柴田町が、主催して、東北子ども博というものを今まで取り組んでこられたそうです。今年はちょっとコロナの影響で縮小して開催するという事なんですけども、このような地域と大学の連携をもっと深めていけばいいんじゃないかということです。特に仙台大学さんはスポーツが有名ですので、スポーツと健康とか、お互いの持つる資源を生かして、何かイベント等で交流できればというような意見をちょうだいしております。

次に志子田委員さんからのご意見ですけれども、やはり情報の共有とか、多様な団体間の連携みたいなところが重要なのかなというふうに読み取ってきました。やはり皆さんが自分で主体的に一步踏み出すという気持ちが大事で、行動するのに、連携、いろんな方々のサポートみたいなところも必要ですし、相談できるような体制、普段からの協力体制みたいなところが大事なのではないかというご意見をいただきました。

ちょっと簡単にまとめたんですけれども、志子田委員さん補足ありますでしょうか。

志子田副会長：ここに書いた通り、自分で一步踏み出すということがあったけど、一番の根底になっているのは弟が障害者だったので、その関係で色々な面で、やりたかったけれど手伝いかなかったけれどできなかったっていうのがあります。あとは、子供たちが育つときに、自分のふるさとというのを顧みることができるようなになればいいなと思っています。

自分がたまたま転勤した先で、転勤族だった私の上司が、娘さんが成人式の時に、「お父さんとお母さんにはふるさとあるよね。自分と弟は学校も5回も6回も変わっていて、ふるさとなないんだ」と言われたそうです。それで俺は子供にふるさとを残してやりたいということで単身赴任を15年やったんだけど。それが根底にあってやっぱり色々なことに足を突っ込む、顔を突っ込むというのが多くなっているんじゃないかなっていうのはあります。

中嶋会長：ありがとうございます。今、子供たちというキーワードが出ましたが、別な地域でUターンしてきた30代ぐらいの若い方に、何で戻ってきたんですかって聞いたら、やっぱり小学校ぐらいの時代の地域に対してのいい思い出があり、そこが戻ってくるきっかけになったっていうことでした。小さい時の地域での、愛着みたいなのところになるんでしょうかね、そういうのがすごく大事なんだとその時、思いました。子供さんたちに対する働きかけっていうのも必要だなっていうふうに思います。

次に阿部委員さんのご意見を私の方で簡単にまとめさせていただきます。これまで実施されていることで続けていきたいことと、今後取り組んでいきたいと思うことということ、二つの視点から具体的な事例を挙げていただきました。

これまで実施されていることとしては、クリーン作戦、仙台大の留学生さんとの交流、あとはごみ集積所を隣の地区と共同で購入するという、行政区と区内の諸団体と連携して、スポーツレクリエーションとか、防火の活動などそういうことで少しずつ意識を醸成していくことが大事なんじゃないかというようなご意見をいただいています。

今後取り組んでいきたいと思うことについては、花のまちということから、フラワーロードですとか、今出ている子供たちへの視点とか、例えば災害とか環境美化、あとは大学と連携したいろいろな活動っていうのができるんじゃないかと思っています。

阿部さんの方で、これに対して、追加でお話があれば。

阿部委員：できるだけたくさん書けて言われたので。思いつくことをただただそちらに書いた感じで

す。

中嶋会長：ありがとうございます。本当に具体的にたくさん書いていただきました。

次に関委員さんからいただいた意見です。まず、町内会とか行政区の中の地域の繋がりというのがすごく大事じゃないかということで、災害発生時とかそういう有事の際の連携に対して、やっぱり普段からのスポーツとかの交流を通じて、関係性を構築していくことが大事なんじゃないかというようなご意見をいただいています。

あとは行政区のあり方とか、最近変更がありましたけれども、町民の皆さんにその制度のあり方とか、その辺を周知していた方がいいんじゃないかということです。

また、現在の行政区の世帯数がかかなり大規模なので、少しコンパクトに見直すことも有効なのではないかということと、皆さん集まる集会所の維持が負担になってきているという課題、町内会費の課題なども挙げられております。

町の支援については、先ほどありました地域間での格差があるので、少しその辺は町の指導とかも入れていくべきじゃないかということですし、前期の審議会で話し合った部分でもあるんですけども、町からの補助金、助成金について制度のあり方を見直したほうがいいんじゃないかというようなご意見をいただいております。

関さん何か補足ありますか。

関委員：あまり言いたくないんですけど、うちの行政区が一番遅れているんですよ。区長がもう63年も変わっていません。今までは何をやるにもできなかったんです。

そんなんでね、皆さんの区と合わせていくにはちょっと時間がかかるかと思っています。どこと連携する、行政区と連携すると言ったって、やはり、まず地元がそういう区だったんで、徐々にね。うちの行政区では、来年の3月までに今の集会所を壊して作ります。だけど行政区の区費ですけど、今10区は、620戸あるんですが、そのうちに町内会費を払っているのは400です。段々減っているんですよ。29Aなんかね、町内会費じゃなくて、区費としてもらっている。全員からもらうんですよ。だから予算立てやすいわけです。そういう動きがあるので、まず10区を立て直すのが先決かなと思って書きました。

中嶋会長：ありがとうございます。繋がりっていう意見も出たんですけども、やっぱりちょっと制度的に現状と合わない部分も出てきているという指摘だと思うので。その辺も見直す必要があるのかなと思います。

あとは区長がずっと同じ方というのは結構よくある事例で、なかなかそれで新陳代謝ができないっていう課題、結構いろんな町内会とかで聞くんですけども。やっぱり継いでくれる人がいないというか、人材が居なくて結局同じ人がやってるっていうことなので。

関委員：いやそうじゃないんですよ。

中嶋会長：そうなんですか。やりたくてやっているんですかね。ただ、人材育成みたいなところも、課題なのかとは、個人的には感じています。あとは、行政区同士の連携は、言うことは簡単なんですけども、やっぱりそれぞれの成り立ちとかやり方が結構違って、隣同士でもなかなか、さあやりましようって言っても、出来ないっていう意見もあるので、実際どうすればいいかっていうところは、また皆

さんからご意見伺えればと思います。

佐藤委員さん。来ましたね。(佐藤委員入場)

今ですね、皆さんから書いていただいた宿題をひと通り、読み合わせて確認をされていて、ちょうど佐藤さんが次の番だったんですが、私の方で簡単に説明して、あと補足いただいてましたので、ご紹介させていただきたいと思います。

佐藤委員：この場にふさわしいかどうかかわかんないですけど、最近ただ避難するだけじゃなくて、コロナの問題とかで、避難した先でまた濃厚接触者と分けたりしなきゃいけないような、いろんな課題が突きつけられているものですから、普段から知人とか知り合いとかに広げていくようなことも、個人としてもやらなきゃいけないんじゃないかなと。

それから、仙台大学には前から期待をしているんですけども。直接学生の人と話をしたことがないものから。大学生の方からこっちに言いたいこととか、一緒にやるようなことがあればいいなと思ったわけです。

それから、柴田町は、花のまちというスローガンがありますけど、私個人としては仙台に近くて、非常に住みやすい自然に恵まれた場所というキャッチフレーズで、何とか人口ふやせないかなと、こういう願いありまして、誰か来てくれないかなという希望です。

中嶋会長：移住というのは、大学生がそのまま町にということですか。

佐藤委員：いやいや、最近は蔵王とかそっちこっちで移住なんかやってますよね。柴田町にも誰かこないかなと。

中嶋会長：そうですね大学の交流ですか、あとは、外の人材をうまく定住に結びつけて人材をふやすってようなご意見をいただきました。

次に村山委員さんのご意見、私の方で簡単にご紹介させていただきます。

町内会の実際の声として、役員の方にご意見聞いていただいたんでしょうかね。

やはり大学生との連携による高齢者向けの健康体操などをやっていただきたいということと、あとは、近隣地区との連携ということで除草作業とかの部分では、上手く連携していけるのではないかとということとでいただいています。

あとは中学校との連携ですかね。災害時の避難所になっている中学校との何か体制づくりなども必要なのではないかということでした。

あとは、個人的なご経験から、ゆる.ぷらでのハレトケ座談会に参加されたということでご紹介いただいてまして、こういうような取り組みが地域の連携に役立つのではないかとということで、個人ベースの取り組みも地域内の連携につながるのではないかとということとで大丈夫でしたでしょうか。そういう感じなのかなと思いました。

あとはゆるく活動を継続するとか、仙台大生と気軽に交流できるような場所としてゆる.ぷらを活用してはどうかというようなご意見かなと思います。

説明がちょっと間違ったところがあれば補足してください。

村山委員：皆さんのような具体的な意見も大事なんですけど、もう一つ、志子田委員さんと同じように、

主体的に、何も無いところから地域の人達、ここに来る人達から沸き上がって、連携していくっていうものを作っていく方法として、ゆる.ぷらさんのハレトケ座談会の5回目のまとめだけに出たんですけども、そのときは、船岡から1人、槻木から2人、船迫から2人というふうに、ここに集まっている方自体が色々な地域の方でした。そのようなことに目を向けて、何かしらのテーマで座談会を月に1回とか開いて、何回かやっているうちに、そこに気持ちに通じる人が集まって、つながりが出来て、何かを作り上げていくっていうものがあればいいなと思います。

あとは、ここで仙台大生のカフェとかの開催も可能性はあると聞いたので、将来的にここが発信になれば。たしか前回、佐々木委員がどこかの場所を仙台大生の食べる場所にしたいみたいなお話をしていたんですけど、まずここで何か小さいものができたら、もっと大きいところへの広がりなど、そういうことに結びついたらいいなという希望です。

中嶋会長：ゆる.ぷらをベースとした、場づくりとか、参加のきっかけづくりみたいなことができるんじゃないかっていうご意見かなと思います。

では大庭委員さんのご意見を簡単にご紹介したいと思います。大庭さんも実践っていうのはもうすでにやられていることと。あとは提案ですかね、企画ということで、2種類に分けて書いていただきました。

実践の部分では、お元気ですか作戦とか、花のまち柴田植栽などで、実際に大学とか、企業と連携している事例とか、あとは中学校やトヨタカロラの社会貢献事業として実施した花のまち柴田ラベンダー活動、あとはユニバーサル見学会、障害者福祉協会との連携事業なんかもご紹介いただきました。

あと企画としては、こちらは花のまち柴田の植栽活動をやったらどうか。これは何となく女性中心のことかなと思いますし、次は男の居場所等の社会見学ということで、実際に住民の方に地元の企業との連携ですかね、トヨタとか仙台大とか自衛隊とか、そういうところの交流促進みたいなものです。

大庭委員：企画のところはこれからというところがあって、企画1の花のまちについては、やはり皆が花のまち柴田だというふうには思ってるんですけど、個々に動いて連携取れていないところがあるなというところがあったので、ちょっと2、3仕掛けたものです。それから企画2の男の居場所については、やはり男性の社会参加というか、シニア層がもうちょっと参加してくれたらいいかな、どうしたらいいだろうというのは、多分どこでも課題だと思うんですが、きっかけづくりとして、もしかしたらトヨタカロラさんとか男性が比較的行きやすい場所とコラボしてみたりとかも必要だし、あとは大学が社会見学の場だったりすると、意外とみんな行ってくれたりするのかなと思いました。

いきいき学園のように、大学生みたいな気分になれるところが人気なのであれば、逆に大学を社会見学の場所に入れてしまうとか。宮城県でよく言われているように、農業と福祉、それから地域を連携することがあれば、花のまちに植物でつながっていけるのかなというところと持続可能なところまでつながっていければいいのかなと思うところです。

中嶋会長：うまく地域資源を生かして繋がりを作っていきような活動、いろいろ提案いただいたと思います。

最後に児玉委員さんの意見を紹介させていただきます。四つ挙げていただきました。

災害時の、実際の経験から、やっぱり行政区ごとにいろいろ、活動とか対応が違っていたので、どの行政区でも安心して避難できるような対応について、行政区間で共有できるようにしたほうがいいんじ

やないかというようなご意見です。

あとは、自然災害が最近多発しているので、実際に避難所の生活を体験したり、社協と連携して実践してみるなど、具体的な取り組みをやってみてはどうかということでした。

あとは、子ども食堂とか学習支援を大学と一緒にできるんじゃないかというようなご提案をいただいています。

また、高齢化の顕著な行政区というのは、実際なかなか連携と言われても難しいんじゃないかというようなご指摘があります。高齢化の顕著な行政区をサポートするような意味で、隣の行政区と連携したり、一緒に計画を行う仕組みを作ったらいいんじゃないかというお話かと思います。

一通り皆様のご意見いただきまして、皆さんバックグラウンド色々お持ちなので、様々な視点から、いいアイデアもたくさん挙がってきたかと思います。

少し前の方でまとめてはいただいていたんですけども。ここで、具体的に今取り組まれている町の事例について、1回ご紹介していただこうかなと思いますが、大丈夫ですか。

(事務局より「参考資料1」に基づき、町内や近隣の自治会や地域同士の連携事例について情報提供)

中嶋会長：ありがとうございます。実際に町内でやっているような事例もいくつか紹介いただいたんですけど、何かこれをご覧になって、ご意見とか感想とかありましたらお伺いしたいんですが、実際にこの区に入ってらっしゃる方はいるのでしょうか。協議会に関わってらっしゃる方、もしよければ、連携した取り組みということで。

志子田副会長：槻木地域づくり推進協議会の方に育成会の会長ということで入っています。

それ以前も、ここにありますメタセコイアの奇跡！光り輝け槻木駅というのは、17年前からやっています。これは槻木中学校区全体で取り組んでいる事業です。発端は、学校荒廃が進んでいたということで、平成に入ってから学校崩壊が一番激しい時期に、槻木地域は、全国でもワースト3に入り、指定された地域になったんですよ。それでその浄化のために、国から助成金がつくということで、当時の生涯学習課の課長が音頭をとりまして、このままでは槻木地域がだめになるということで、何かやって少しでも明るい話題をとるところから始めたのがメタセコイアなんです。

私自身もこれに関わったのは、たまたま娘の同級生に痛ましい事故が続いたんですよ。それも5年おきくらいで、それで、上の娘が大学行った時に、柴田町とは言えるけど、槻木とは言えないと言って。当時、テレビのライターとかが盛んに来て放映してくれたおかげで、逆に、その地域出身の子たちはその名前が言えなくなったっていうのがあります。ふるさとを名乗れないっていうのはやっぱりね。それで、たまたま当時の課長からこういうのやろうと、一緒に付き合えというようにやらされたのが最初です。

このメタセコイアは、13区から28区、槻木中学校区の全部で4600世帯ぐらいを対象に、募金活動で、資金は捻出していますけれど、いろいろな備品とかそういうもののお金までは回らないというのが現状です。

やってみてよかったということは、まず一つは、まだ東北本線を夜行列車が通っているときに、夜行列車に乗っている人が、今流でいうブログとかそういうものでいろいろなところに発信してくれたおかげで、逆に写真撮り来てくれるとかね、そういうのがありました。

あとは、一番うれしいのは、やって5年目のときに、今のコロナと同じように、確か、インフルエン

ザが流行って、町全体のイベント自粛っていうのがあって、すべての行事がなくなった年があったんですが、その時も光だけは灯したんですよ。そしたら、成人式に帰って来た子供達に「やってんだ」と言われたこと。その後も、タクシーの運転手さんにたまに言われるのは、成人式に帰ってきた子が「まだやっているんだ、今年もやっているんだね」って言ってましたよって言われると、それはやっぱりやっていて、お金の面は厳しいけれど、心は非常に豊かになるなと思って。子供たちが、この地域から出て行って、ほかの地域で暮らすときも、うちの町ではこういうのがあるよ、なんにもないけれど、これだけは誇れるよというものが残せているっていうのが、最高かなと思っています。

あとは、子供たちに関係するようなことでは、育成会もですけども、自分が小さいときは、年上の人にこうしてもらった、近所のおじさんおばさんにこうしてもらったっていうのを、それを思い起こさせようということで、地域の中で、地域探訪っていうのを、年に2回やっています。今年度は3回やります。それで、今年度は、1回は夏休み中にやるということで、できれば子供さんが夏休みの自由研究の課題の一つにしてくれればと思っています。地域の中では、40年来住んでいるけれど、町内全部歩いたことないっていうような人がほとんどだそうです。子供にふるさとを残すための事業というのはいろんなことに顔を出して、足を使っています。

中嶋会長：中学校区で連携されているということなんですけども、このイベントをやったことで他の部分での何かメリットというか、効果はありましたか。

志子田副会長：ありました。いろんなことに困ったときに、あそこに地区の誰それだったらわかるんじゃないかっていうのを教えてもらったりします。例えば区長さんとかそういう人たちと顔見知りになっていると、いろんなことをやるときに、それじゃあ誰それのところにちょっと行ってみてこい、家ここだからと教えてもらって、行ってそこで用を足すとかね。そういうのがあって、やはり、まさに地域連携というわけではないけど、私の場合は槻木中学校区の、人たちは、いろんな面でお世話なったりしています。特にマラソンなんかは、槻木中学校区内を走るの、ボランティアとか、そういう時には、責任者誰それなんだけどっていう名前を見ても顔はわからないけれど、なんだあその家だから行って来いって責任者の人とかそういう人たちとお話したりとかね、やっぱ自分がいろんなもの関わってる上でも非常に、よかったなっていうのが、このメタセコイヤのおかげかなと思っています。

中嶋会長：そういうご経験から、先ほど最初に宿題に書いてもらった、気軽に相談したりとか、そういう意見が出されたのかなと思います。

大体、意見が出尽くしたみたいですが、分類をするようなことだったんですが、どうですかね。もうちょっと、今までのことでおさらいしたいことなんかは。

佐山主任主査：そういえばこういうのあったなっていうのはありますか。

中嶋会長：今、志子田さんからご紹介いただいたような、実際に身近でも隣同士や近隣で連携しているとか、団体同士で連携していることがあればご意見いただきたいのですが。社協では結構やっているような感じはしますけれども。

大庭委員：町内会の連携で言えば、町内会がお困りになったときには、出前講座とかに行かせていただ

きます。あとは町内会に限らず、子育てサポートだとか。

中嶋会長：具体的な課題というか、どういう要望、議題などがありますか。

大庭委員：課題はさっき言ったように、担い手が、今はいいけれどもっていう、区長さんとかが次の世代にバトンを渡さなければいけないんだよねってというのはあります。これについては、この間商工会女性部さんも、今自分たちはいいけれどもと言っていました。

また、志子田さんがおっしゃったように、子供たちにいいなって感じる、いい思い出を作ってあげることが、Uターンとか、担い手につながるということだと思います。

中嶋会長：佐藤委員からもご意見いただいた、移住してくる方は、実際柴田町はどうなんでしょう。丸森町とかは、結構移住して起業してる人とかが多いなというイメージがあるんですけども。柴田町の現状や傾向はどうですか。結構大きい工場とかもあるので、それなりに外の方も入ってきているのかなと思います。

藤原まちづくり政策課長：転入してきているとか、転出している方、あるいは自然増減ってのもあるので、数字的なものはある程度押さえられるんだけど、中身はどうなんだってなると、なかなか分析は難しいですね。ただ、地域おこし協力隊であったり、移住してここで活動していくという方は、都市部のほうからも来られていて、現在3名なんですけれども、そういった若い人は来ています。

それから、ふるさと納税の話をする、いわゆるシティプロモーションということで、様々なプロモーションをやっているんですね。ふるさと納税の額が伸びているというところを見ると、結果論なんだけれども、関係している人口が増えて、それをきっかけにこちらに来ている人もいるんじゃないかっていうのは、話しをしているんですけども、もっと目に見える形での施策というのをこれから考えていかなければならないというのは課題としてあります。

中嶋会長：佐藤委員は、たしかこの前の審議会の時に、企業の社員さんが昼間は地域にいるんだからもうちょっと生かしたらいいんじゃないかっていうご発言をされていたのが印象的だったんですけど、企業と地域の関わりみたいなものは、今のところは結構あるんでしょうか。町の方で把握していますか。

佐々木主事：植栽会などで企業との関わりはあります。

阿部委員：さくらマラソンも協賛はいただいていますし、あとは私が書いたように一緒にごみ拾いをやっている。

中嶋会長：環境美化みたいなのところですかね。

阿部委員：参考資料にある、地域づくり推進協議会ってというのは、町の方で組織したものなんですか。

志子田副会長：推進協は今から20年ぐらい前じゃないですか。

藤原まちづくり政策課長：町の先導はあったと思いますね。自発的なものではないですが、きっかけということにはなったんだろうと思いますね。

阿部委員：そう思います。地域コミュニティをどう活発にしていくなかみたいなことを考えていくと、やはり自発的なことが望ましいと思っていたんですけども、これを見ていて、きっかけづくりもありなんだなと思いますね。これ、すごいですよね、志子田さんがやっていることもそうだし。

志子田副会長：推進協の一つの実績として、ふるさと祭りっていうのはどこの地区でもあるんだよね。西住地区でも公民館を中心にして、そういう活動やってるし。だから、推進協っていうのは、町が、それこそ課長がまだ20代の頃に出来上がったやつだよ。たしか。

藤原まちづくり政策課長：相当古いと思います。

志子田副会長：うちの区長は、そういうことに関わっていたので、詳しく言われますけど、当時、今は退職して地元で熊ちゃん漬けなるものを作っている人が、このままでは駄目なんだ、駄目なんだっていうことからスタートしたみたいなんですけどね。

阿部委員：このふるさと協議会間での情報交換みたいなことはやっていないんですか。

志子田副会長：ほとんどないね。

阿部委員：この丸森町の事例を見てもそうだけど、私たちこのふるさと協議会に入っていない者はこの人たちがどんなことをやっているかということ意外に知らないんです。

志子田副会長：一応町の広報誌とかそういうのではね。

阿部委員：断片的には出てくるけれども、年間を通じてこんなことしてるよということや、他の人が関わることがあるのかなのかとか、そういう情報というのはない。やはり情報なんだなみたいな話はさっきから思っています。

村山委員：船迫中学校地区は多分会報も全戸に出してますし、文化部会のふるさと文化祭はコロナ前で30回を迎えているので、おそらく立ち上がったのはその前なのかなっていう感じです。

ここでは区長さんたち、6行政区の方が、企業さんにも会って、文化祭のときにはそういった協力金をいただいたりしながら、各地区の方が自慢ののどや踊りや体操を披露するという、そこには地元の保育園もありますし、それからあと幼稚園もありますので、その人達の発表会にもなっていて大変盛り上がるイベントになっているんですね。

そのほかにも、ここには書いてありませんけれどもソフトボールとか、そういったものも各地区対抗で皆さんそれぞれ、頑張っていて、私の町内会では優勝すると「見事に優勝しました」というのを4丁目便りに載せたりとか、あと育成会も関わってくれてるので、かるた取り大会の読み札の部で優勝しましたとか、かるた取り大会は大人と子供で共同でやるので、意外と、私今までよくわからなかったんですけど

ども、逆に言われて、頑張っているのかなと思いました。推進協議会ごとの交流から始まるという、そういう案もあるのかなあって、思ったりしていました。

中嶋会長：全くやってないってわけではなくて、よく考えると、これはやっているかなというようなことはいろいろ出てきそうな気はします。

もし、キーワード整理していただいているのであれば、少しこちら辺でまとめてご報告をお願いします。

佐山主任主査：もうすでに、例えば人材育成だとか、本来自発的なことが望ましいけれども、そういうきっかけ作りをするのも重要だねとか、こういうのが足りないという意見も出ていますが、とりあえず出された意見を羅列していきました。

大学と連携してイベントをもっと広く町内に広めていくということ。子供たちにふるさとを残していくこと。クリーン作戦を地域と企業で行うこと。仙台大学の留学生と交流していること。隣の地区とごみ集積所を一緒にしていること。レクリエーション活動やスポーツ大会、火の用心の活動などを各種団体と連携していること。あと、何回か出ていましたが、公園などの除草活動を地域同士でやっているということ。あとは防災面について、高台にある企業と避難所などで連携する。あとは花のまちの話で、町内各所をフラワーロードにするであるとか、子供の見守りというのは町全体の自治会が連携してやるというのでもいいんじゃないかという話が出ました。あとは大学生のマナー向上を、地域と管理会社と大学が連携してやること。移住を進めていくときに、地域だけでなく、他市町村とかとも連携していくこと。あとは地域の悩みを気軽に話し合える場を作ったらどうかということ。あとは大学生とか大学の話がいっぱい出ていました。大学生とそもそも話をする機会を設けたいとか、大学生が健康体操を地域でやる、あとはカフェとか、大学生と子供食堂であるとか学習支援を行う、そういったものが出ていました。あとは共通テーマで座談会をすることでつながりを作ること。同じ避難所に避難する行政区同士で、備蓄であるとか避難訓練だとかそういったものを一緒にやること。男性の社会参加のために男性が行きやすい場所とか、企業とかと連携すること。同じような感じですけども、防災について行政区同士で情報交換すること。防災訓練であるとか避難所の生活体験であるとかを社協と連携して行うこと。地区の計画に関しては一つの区じゃなくて合同で相談しながら作ってもいいんじゃないかという話もありました。あとはイベントで連携したことによって、他の地域の人とも顔見知りになったので、困ったときに助けてもらったりだとか顔が利くようになったという話もありました。企業との関わりについては、ごみ拾いであるとか植栽会であるとか、あとはイベントに協賛してもらったりだとかということがありますよということでした。

いろいろ出したんですけど、連携してやろうとしてること、事柄みたいなものをちょっと、出してみました。ほかにもあるかなと思うんですけど、一番、例えば防災、地域の防災のことについてという意見が結構出ていたのかなという。あとは例えば、環境衛生とか、環境美化活動っていうのも結構出ていたのかなと、ごみ集積所とか、除草作業の話だとか、あとフラワーロードはまたちょっとあれですけど、花のまちとかも環境美化に関わることなのかなと。あとは、子供関連とかで、子供じゃないですけど U ターンの話とか、あとは子供会との連携でレクリエーションしていますとか、子供の見守りですとか、子供食堂、あとはイベントとかそういうものの意見もあったのかなと思っています。あとは高齢者の関係とか、情報共有とか、交流とか、そういうカテゴリーとかがあるのかなと思いつつ、見ていました。

阿部委員：その上の、子供関係とか高齢者とか環境美化とかそれらの連携も図るために、ツールとしてあるのが情報共有かと。

中嶋会長：そうですね。さっきの場づくりとかもそうかもしれないですね。

佐山主任主査：そのための情報共有という感じですかね。

藤原まちづくり政策課長：ちょっと抽象的な話かもしれませんが、やはり情報共有っていうのはいろんなところで出てきているから、その出し方であるとか、まとめ方であったりとかその辺の仕組みはちょっと考えた方がいいのかなと思いますね。それから、区同士の繋がりで、同じ課題でつながるといのが出てきました。逆に、例えば同じ課題だからつながりやすいんだけど、違った特徴の地域が補い合うとか、そういった、同じ課題でなくてもつながることはできるかもしれないなというのはちょっと思いますね。じゃあそれを、どうつなげるのか、つなげる人はいったい誰なんだという話も出てくるんですけど、場づくりにもつながりますかね、つながるための場をどういうふうに作っていくかというのは、今後話し合っていくことになる気がします。あとは阿部さんの連携というところで、区内のことも重視しているような事例があって、区内のつながりの作り方、それは多分他の区とつながるのも似たようなところがあるのかなと思ってたんですけども、区内のつながりが、どうやったらうまくつながったのかなというのをちょっと聞いてみたいというのがありました。

中嶋会長：ありがとうございます。私も今まとめていただいたものを見て、大体、分野としてはイベント関係の連携、あとは二つ目として、環境衛生とか環境美化、あとは防災、あとは子供ですかね、新しいキーワードで子供っていうのが皆さんから結構多く上げられたかなと思います。あとは一部外部の移住者とか、そういう外の人材の活用とか、あとあんまり意外と出なかったなというのが福祉とか高齢者のご意見だったんですけども大体、6個ぐらいに分けられるのかなと思いました。

皆さんからの実際の取り組みを聞くと、イベントとかは実際企業さんが協賛していただいたり、何か一部で連携されているような、活動の様子も見られますし、環境美化も同じように、ごみ拾いと、企業が協力しているような活動もあります。あと防災に関しては地区同士の連携とか、そういう連携が大事だよっていうようなご意見を結構いただいたかなと思っています。

大体イベント、環境美化、防災、福祉、子供、あとは外部の移住者みたいな分野になるのかなと思うんですけども、あとは連携先としては、地域同士の連携とあと企業さんとの連携とあとは、大学とか学校との連携と、あとは地域団体ですね、社協とか、ゆる.ぷらもそうかもしれませんが、そういう団体との連携が大事なんだろうなど。大体連携先も四つぐらい。地域同士とか、企業、大学、団体っていうのが四つぐらい上がってきました。

手段として最後におっしゃっていただいた情報共有、あとは場づくりとか、皆さんの参加のきっかけづくりみたいな、それが多分情報共有とか場づくりになるんだと思うんですけども、そういう手段があるんじゃないかというようなお話だったかなというふうに思います。

最後に藤原さんからちょっと投げかけていただいたんですけども、区内の繋がりでですかねそれをどのようにされているとか、何か、あれば教えていただきたいということなんですけど、阿部さんいかがですか。

阿部委員：うちは最近何もかにも大勢の人が出てくるようになったんですけど。基本は情報共有だと思うんですね。例えば、区長が役場で聞いてきたことはすべてみんなに配る。それから、毎月、区会報を出して、廃品回収の金額はこのぐらいだったよとか、今度は草取りをしますとか、そういう細かいことをいっぱい出している。それからやたらうちの区長は声かけて歩くんですよ。今まで顔も見せなかった人が突然防災部長になったのでびっくりしたんだけど、みんなととりあえずお友達になって、何でもいいから役員やってよみたいなことを言っているうちに役員がどんどん増えてきた。そういうふうに広がってくると、出やすい空気感もあるんでしょうね。近年みないほど活発になってきたなっていう感じがあるので、結局、コミュニケーションづくりだと、そういう地道な日常かなと思います。

中嶋会長：先ほどの区同士の連携も顔が見えるとなんかこう相談しやすいとか、そういうことなのかと思います。でもそれを日常的に、地域の交流がない中で、どうやって作っていかってというのが課題なのかなと思いました。

阿部委員：一生懸命やっている人たちが何人かいて、そういうのを見ていると周りが流されるということもありますよね。

中嶋会長：そうですね。顔が見えるとあのひとだったら一緒にやりたい、やってもいいかなとか協力してもいいかなとなると思いました。

阿部委員：ごみ集積所掃除して、大学生がめちゃくちゃに出していると、玄関に持って行ってノックして指導してくるとか、そこまでやらなくていいのになって思いますが、皆さんが頑張っていच्छやるといことだと思えます。だから基本は無理やりみたいだけど、みんなで同じ方向を向くためには、やはり情報を共有していくしかない。

中嶋会長：そうですね。やはり情報共有、皆で同じ情報持っていて、その上で、一緒にやるという活動につながっていくのかなと思いました。ここが難しいので、なかなかできてないんですけども。

ちょっと今、次のアイデアみたいな部分に触れていただいたと思うんですけど、残りちょっと20分ぐらい、少し次回に向けて、いろいろアイデアとか、こういうのがあったらという意見を出していただければ。少しキーワードっぽいところも出てきておりますが、次のステップとして、実際、連携していくために何が必要かとか、逆に情報共有できていない原因は何でだろうみたいなところを、次回詳しく話し合っていきたいなと思うので、少し今日の時点で、皆さん、思いつくところあれば伺いたいなと思ってるんですけども。

阿部委員：情報共有をできないことを突き詰めるよりも、より情報共有がうまく出来る方法をみんなで知恵を絞る方が、何か早く前に進めるかなという気がします。後ろを向いていても仕方ないので。

中嶋会長：その通りだと思います。では、前向きな意見でいきたいと思います。情報共有が大事だというのは何となく皆さん共通のご提案なのかなと思いましたけど。あとは普段のコミュニケーションっていうところは重要なかなと思うんですけども。どうでしょうか、少しテーマ絞った方がいいですか、

例えば防災についてとか、そういうのが話し安ければ。

佐山主任主査：今のお話だと、阿部委員がおっしゃったように、区内の繋がりはやはり、情報共有してやっていくという話だった。あとは例えば、地域と地域が、隣同士とかが連携しなきゃいけないよねとなった時には、これも情報共有とかなんでしょけど、プラスアルファで、それぞれの地域の立場の違いだとか、何かこう、連携が進まない原因であるとか、これがちょっとネックになっているんだよねっていうのが、ないのかなと。

それがうまくいけば、実はスムーズに進むんじゃないかなとかがあると、それをどうやって改善していくかっていう次のステップにいけるのかなと思うんですけども。

志子田副会長：今いろんな話出ているけど、例えば、新興住宅と旧来の地域が一つになった時には、はっきり言ってコミュニケーション取れません。昔からの人たちは俺たちはこのやり方なんだと、最近改善されてきたのは、次の世代の人になったからというのが、実際のところなんです。その前の時代の人たちは大変苦労してるんだよね。新興のところは情報共有なんて簡単なんですよ。なぜかと言ったら、どちらかと言うと外でお金を取る仕事をしてる人が多かったから、統一された情報発信のもとで仕事してきている人が多いんだよね。ところが、旧来の方っていうのは、やっぱりその地域のやり方、地域の伝統というのがあるから、なかなかうまくいかなかった。実際自分のところの区を見ていると、それがまざまざと見えるんだよね。

実際、地域の情報どうのこうのというけれども、地域計画に全部載せてるんだよね。お金を出す関係で、大体地域でやる行事の8割方は地域計画の中に入ってるはずですよ。地域計画はこのゆる。ぷらにも置かれているし、各公民館にもあるし、あとは学習センターにもあるし、もちろん役場にもあるし、槻木の支所にもあるしっていうことで、地域のいろんな行事の情報というのは、あの地域計画を見ると、来年度は何をやる予定になってるなっていうのまでわかるようになっている。

阿部委員：でも、地域計画見たって面白くもなんともない。

志子田副会長：面白いかわく面白くないかわなくて、行事としては全部書かれていますっていうことです。

阿部委員：情報共有の手段っていっぱいあると思うんですよ。別に紙ベースじゃなくても。

さっき言ったように、言葉で伝えることもできる。いろんなやり方がある。それをみんなで知恵を絞って、どういう情報共有の仕方があるかなんかということを考えてみるっていうのは面白いんじゃないかなと思うんです。区長だけでなく、行政区の役員をしてない人も目にして、うちはどうなんじゃないのみたいなことが言えるような、広い情報の発信の仕方みたいなものを、住民自治を活発にする主題にしたい。

志子田副会長：いろいろな面で広域でやる情報の発信方法っていうことなわけだよね。地域内だけでなく。

阿部委員：なんか、さっきの丸森の事例で自分と他の地域の報告会というのがあったじゃないですか。柴田町はいっぱいあるからそれはできないけど。

志子田副会長：実際、丸森でこれをやり始めたのは、前の町長時代に、もとの旧町単位でこの推進協議会と同じように、人がこれから少なくなるしということで、分けたのが実際のまちづくりセンターとかになっているんですよ。

それで、いろんなイベントを活発にやっているとやってないところが出てきたり、地域によっては、町長に直談判して、特定の予算を持っていったりする地区がでたり、町長が変わってから変わっちゃったんだよね。それでめちゃくちゃになってきたんで、こういうことをやって、きちんとした元の本来の形に戻しましょうっていうのでやったということ、今ラジオに1週間に1回ぐらい出ているあそこの町会議員さんが言ってました。

藤原まちづくり政策課長：長く実践して、ご苦労されている意見なのでよくわかります。

新しいところと古いところが交わらない、これも実感なのかなと思ったりするんですけども、私の経験からすると、例えば団体活動だったり色々な活動の中で、他の地域の方であったりとか、年代が違う方であったりとかと話すといろいろな意見が出てきて、はっとすることがあるんですね。

今までのやり方で、閉塞感があって、どうしても前に進めないなっていうところが気分的にあったときに、そういうので新たな何か、こうやたらうまくいくかもしれないな、前に進むかもしれないなというのも、別な意味で経験しているところがあるので、それが地域コミュニティの中で生かせるのかどうかかわからないんですけど、何か障害を少しでも乗り越えていけるものはないかなっていうのを探るのも一つかなと思います。

まして行政区が違えば温度差がやっぱり出るので、そこのところ、うまくつながっていけばいいんじゃないかなと思うんです。佐山が先ほど話したように、つながるときに何が障害になっているのかとか、逆に言うと、何があつたらつながりやすいかとかというものも考えると、ちょっとヒントみたいなものが出てくるんじゃないかなという気がします。

丸森の件も私は経緯はわかりません。ただ、その中でうまくいってる部分があるとなれば、やり方のヒントというのは転がっている気がするんですよ。柴田町に生かせるものがあれば、盗んじゃえみたいなそういう気持ちで見ても面白いかなと思ったりはしました。

今の話が整理していく上でどのくらい参考になるかどうかかわからないんですけど、そんな感想です。

中嶋会長：ありがとうございます。今日お休みの児玉さんから、高齢化の顕著な行政区を周りの行政区で支えるような仕組みとかできないかというご提案はいただいています、状況の違うところで支え合うということも、必要になってくるのかなと思いました。

行政区対行政区、一対一で難しければ、間に入る何かが必要なのかとか、何があればつながれるのか、そういうところを次回、考えていけばいいのかなということで思っています。

最後に少し課長から問題提起をいただいたところで、終わりにしていきたいなと思うんですけども、次回、また宿題あるんでしょうかね。今の連携のために必要なこととか、連携の障害になってること、ちょっと今、さわりでご意見いただいたんですけども、また少しその辺を、次回までにお家で考えてきていただければ。

佐山主任主査：一応予定を説明します。

今回出された、こういう連携があつたらいいなという意見は、まさにごもつともであって、それが進

めば地域がよりよくなるというのは間違いないことだとは思いますが。ですので、それが実際に行われている場合は、こういう要因があったからできている、だから他の地域もこういうふうになればやれるんじゃないかっていうヒントですね。もしくは、今からこういうふうになったらいいなと思うものに関しては、なったらいいなと思っててもならない原因が何か、そのために、どういうものがあれば、もしくはどういうものがなくなればできるっていうようなことを、皆さんに考えていただくというようなことをお願いしたいと思います。

今日出された意見の集約をしたものを、少し分類し直してもう一度皆さんのお手元にお配りした上で事前に出していただく宿題を出させていただければと事務局では考えております。よろしくお願ひします。

中嶋会長：先ほども、言われてみるとこういう連携の事例があったなっていうところも、ちょこちょこ出て来たので、また何か実際の取り組みなんかもあれば、あわせて出していただけると皆さんの参考になるかなと思います。

では、議事についてはこの辺で終わりにしまして、その他に移りたいと思います。事務局に一度お返しいたします。

5. その他

(柴田町議会が早稲田大学マニフェスト研究所議会改革度ランキングで全国第7位となった件について、委員から質問あり、情報共有)

(次回日程予定を確認)

6. 閉会

志子田委員：やはり情報共有には、自分が発信するというのも大事じゃないかなと思うんです。自分が情報発信しなかったら、相手も情報を発信してくれないっていうのがありますから。

このあいだ私たちの地区では、コロナ禍ということで、自主防災の訓練の代わりに、各班長さんに参加いただき第一次避難所を巡り歩く防災ウォークラリーをやりました。32人の班長さんのうち28人が参加しましたが、町内をこのように歩いたことのある人は、11人しかいませんでした。地域の防災マップは全家庭に配っており、避難所はここですよ、あそこですよとなっていますが、班長さんになっている人ですらそれを知らなかったというのに、びっくりしました。

だから、情報というのはこちらから発信したときに、それを逆に問い掛けるっていうのも大事だになっていうのは思いました。

この次の地域の連携の障害になることっていうのは、いろんなところから情報を集めないと、宿題ができないのかなと思いますけれど、私の場合はアナログで調べたいと思います。

次回は10月頃になりますが、皆さんもこの夏をコロナに負けないでやってもらいたいなと思います。今日はどうもありがとうございました。

以上で、全ての議事を終了したので、会長は午後3時42分閉会を宣言した。

本会議の顛末を記載し、その内容が相違ないことを証するため、次のとおり署名する。

令和 年 月 日

会議録署名委員

会議録署名委員